平成21年3月15日発行　第40巻 第3号　毎月1回15日発行　昭和46年1月27日第3種郵便物認可
ISSN 0385-2229

月刊 地域保健

3
2009

●特集
新型インフルエンザ対策に
どう取り組むか

●FACE2009
宮城大学看護学部教授
安齋由貴子さん

Face 2009

「現場を知るもの」が一番よく知っている

「この人に必要な健康サービス」の裁量権は、私たちが持っている

宮城大学看護学部教授
安齋由貴子さん

photographs : Sei Kamiyasu

保健師の人材育成は全国で喫緊の課題となっている。現場で培った貴重な体験を記録に残していないベテラン保健師。パソコンを駆使した文章づくりはこなせても、肝心の体験に乏しい若手保健師。「両者の強みを合わせれば、将来の活動につなげていける」と、育成活動を積極的に推進されている宮城大学・安齋教授。分散（点在）配置、業務の縦割り、切れない事業など、常なるハードルを乗り越えるヒントについてお話しいただいた。

保健師活動を見せ、伝える「場」が欲しい

―宮城大学は、県が設立した初の大学（平成9年4月開学）ですね。目的に挙げている「地域との連携」についてお聞かせください。

安齋　臨地実習については、教員と地域のつながりを保つため、また他の大学の実習先が県下で確保できるよう、大和町（たいわちょう）と隣接する富谷町（とみやまち）、仙台市の3カ所に限定し、5人ずつ3グループ、常時、合計15人の学生の実習指導を行っています。教員が実習地に出向いて実習指導をすることを前提として、半年にもわたる実習を受け入れていただいています。

教員が実習地域についてよく知ることができるので、学生もまた地区診断や事業について、講義内容と実習をつなげて考えられるようです。

本学は19年3月に大崎市（18年3月31日に古川市・松山町・三本木町・鹿島台町・岩出山町・鳴子町・田尻町の1市6町が合併してできた市）と「連携協力に関する協定」を結びました。私は18年度の「指導者育成プログラムの作成に関する検討会」（事務局・厚生労働省健康局総務課保健指導室）で構成員を務め、同検討会を引き継いだ20年度の「市町村における新任の人材育成プログラムに関する調査研究」（主体・全国保健師長会）で研究協力者をしていることもあり、同市の保健師人材育成活動に参画しています。

―各地の現場をご覧になり、どのような点をお感じになりましたか？

安齋　本学の設立準備段階から宮城県におり、継続して変化を見ていますが、多くの市町村では優れた活動をしていると思います。しかし、地域の課題が見えても、対策が〝取れない〟現実も目にしました。業務の縦割りにより、保健師同士が横につながって支援し合う関係が薄い現状では、外の力をうまく使うことは必要です。私たちも普段から、「社会資源である大学を活用して

特集

新型インフルエンザ対策にどう取り組むか

バンデミックが懸念される新型インフルエンザについては、国の「新型インフルエンザ対策行動計画」が改訂され、都道府県・市町村においても急ぎ対策が講じられているところである。特集では、新型インフルエンザとパンデミックの解説、厚生労働省の取り組みのほか、県、保健所、自治体の先進的な取り組み事例を紹介する。

p8 新型インフルエンザとパンデミック
新型インフルエンザ・コンサルタント 外岡立人

p16 政府における新型インフルエンザ対策
厚生労働省健康局結核感染症課 石塚哲朗

p24 都道府県の取り組み〈佐賀県〉
キーワードは「あわてない」「集まらない」「がんばらない」
佐賀県統括本部危機管理・広報課、健康福祉本部健康増進課

p36 保健所の取り組み〈佐賀県鳥栖保健福祉事務所〉
大流行時（フェーズ6）を想定したドライブスルー型発熱外来および発熱相談センター設置検討に関する訓練
鳥栖保健福祉事務所 中里栄介

p46 市町村の取り組み〈兵庫県明石市〉
「安全で安心して暮らせるまちづくり」を目指して
明石市役所 山本 徹、永富秀幸

p58 特別区の取り組み〈東京都荒川区〉
全国に先駆けBCPの概念を取り入れた対応マニュアルを作成
荒川区保健所 鷹箸右子

ひよこ保健師 season 2

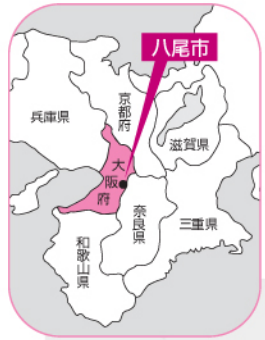
紆余曲折をへて二人三脚で歩み出した「ひよこ二人組み」

保健師の「王道」、母子保健と訪問を軸に

森杉有香子（もりすぎ ゆかこ）さん
窄口美咲（さこぐち みさき）さん

大阪府八尾保健所地域保健課

●文・写真　西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）



古い町並みの残る八尾市久宝寺にて

ひよこ保健師SEASON2の最後を飾るのは、保健師業務の基本中の基本、母子保健を担当する大阪府八尾保健所地域保健課のお二人だ。

最初に登場していただくのは、奈良県大和郡山市出身の森杉有香子さん。八尾保健所に入ってまだ2年目。ここに至るまでさまざまな仕事を経験してきたというが、まずはこの職業を目指したキッカケから聞いてみた。

「父が公務員だったので、小学校までは『お父さんと同じ職業に』と言っていたんですよ。ところが私をとてもかわいがってくれていた祖父が中1のときに肺がんで亡くなってしまいました。オペもできなくて、抗がん剤と対症療法で入退院を繰り返していたのでよくお見舞いに行っていたのです。といっても会話や世話をするわけでなく、隣にいてマンガを読んでいただけなんです。それが悔まれていて、あのときに祖父にしてあげられなかったことをしたいと、看護師への道を考えたのが始まりです」

さまざまな仕事を経験してきた森杉さん

当時、すぐ近くに衛生看護科のある高校があったので進学も真剣に考えたようだ。もちろん、あまりに早い将来の決め方に親の引き止めにあい、結局、普通科に進学することになった。すると少し熱は冷め、同じ医療系でも薬学部への進学も頭をよぎった。

「でもね、私には大学生になりたくないというワケの分からないポリシーが当時ありまして……」

理由を聞くと《大学生＝チャラチャラ遊んでいるイメージ》や《学歴至上主義》に無性に腹が立っていたようで、絶対に大学には行かない！　という強い意志があった。

「なぜか頑なに拒否していたんですよ。とり憑かれたようにね」

今となっては笑い話と断りながらも、当時の頑固さを思い出し笑いしながら話す森杉さん。なかなか面白い人だなーというのが僕の素直な印象だった。

父が持ってきた保健学院の入学案内

高校卒業後に選んだ道は、奈良県立奈良病院附属看護学校だった。「大学は知識を得るところ、看護学校は知識と技術を得るところで即戦力を目指している」と聞きかじっていたからだ。